



日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会 第19回学術集会を終えて

学会長 蝦名美智子
(札幌医科大学)

リーマンショックの不況の中、加えて連続する雨天のなかで学会を迎えました。初日は曇り、二日目は小雨、その前後の土日はどしゃ降りでしたから、それなりの好天?であったと、後で気がつきましたけれども、ですが、会場内は関係なく熱気あふれる意見交換があり、ボランティアさんの笑顔と親切に包まれ、明るく充実した学会になりました。参加人数は962人(会員636、非会員298、学生28)、口演100題、示説93題、シンポジウム1、テーマセッション4、交流セッション5、ランチパフォーマンス4が実施されました。

今回のテーマは「大地の力、子どもの力、語ろう未来—小児看護」で、いろいろな場における子どもの育みについて考えたいと思いました。その第一には、子どもの人権の先進国であるスウェーデンから、ホスピタルプレイスペシャリストのクリスチナ・シルフヴェニウス氏を招き、病気になった子どもがどのように擁護されているかについて特別講演していただきました。スウェーデンでは教育法の第4条で病院に入院した子どもの権利が保障されていること、通常のプレパレクションは看護師の仕事であるが看護師が忙しいときは手伝う、ホスピタルプレイスペシャリストの最も大事な仕事は医療への恐怖心が強い子どもがいるときに、プレ・ホスピタルケアとして数回の家庭訪問をおこなって病院ごっこ遊びを行い、次に来院してもらって病院ごっこ遊びをして、慣れてきたなー、大丈夫だなーとなった時に実際の検査・処置に進むように援助すること、を話されました。



懇親会のクリスチナ氏と通訳の武田氏

教育講演は、小児病院に求められる空間創りに関して、欧米やオーストラリアの小児病院の建築に詳しい千葉大学の柳澤要先生にお話をいただきました。このとき、プログラム上、示説発表、口演発表、テーマセッション、交流セッションが並列でスタートし、残念ながら聞けなかった人が多かったようです。柳澤先生のお話とは

でもおもしろいので聞く機会があれば、絶対に見逃しませんように! なお、特別講演と教育講演は一般公開でした。

上記に加え、交流セッションとプレセミナーが目玉でした。交流セッションは、「私のテーマについて、皆さんと意見交換したい」という学会員に場を提供する参加型の試みです。企画委員が気づかないテーマが日の目をみるチャンスです。最も学会らしい企画と自負しています。5題を受付ました: ①子どもを看る外来のこれから—小児救急認定看護師と一緒に考えよう、②児童相談所における看護師の役割と実際、③最前線で子どもの健康を守る保育園看護師からの発言、④児童虐待防止と小児看護、⑤医療的ケアを要する子どもの在宅療養に向けた家族支援を考える—親の意思決定を支えた看護に焦点をあてて。

プレセミナーは実践的な看護技術を磨くための企画、は表の理由でした。裏があります。北海道は離島で新幹線や特急で気軽に来れるところではない、という嗅覚が働きました。友人達は「原稿できたら行くね」といい、言外に「発表原稿がつかれないときはいかないよー」と聞こえました。では飛行機代を払って参加してよかったという企画を考えようと、学内の有名どころに相談しました。その結果①子どもの呼吸リハビリテーション、②未熟児のポジショニング、③赤ちゃんマッサージ、そしてせっかくホスピタルプレイスペシャリストがスウェーデンからお見えになるので、④スウェーデンのプレパレクション、が実現しました。どれも盛況でした。

さて、学会を開催して最も学習したことは、学会側が決める期日を守らないと学会の準備・運営に支障を来すことでした。期日は守るためにあったのです。過去の罪業を反省し、次の学会から遵法精神で参りたいと思いました。皆さん、学会の期日は守りましょう!!



企画委員のみなさん

日本小児看護学会 第19回学術集会に参加して

■ 桃内 雅代 (伊達赤十字看護専門学校)

第19回学術集会長の蝦名美智子先生の共同研究者として、この学会では北海道内の小児看護教育に携わっている人たちと活動してきた成果を報告しようと、久しぶりに筆頭研究者として研究のまとめに取組みました。そして、この学会で一般口演発表し、緊張の中にも同じ志をもつ参加者と体験を共有することができ、報告までの準備の大変さは心地よい達成感に代わりました。

この学会では、会員同士の相互交流を目的とした交流セッション、学会のプロジェクト活動等の成果が示されたテーマセッション、他にもシンポジウム、教育講演、ランチパフォーマンスなど、多くの企画があり、全てに参加できませんでした。参加でき

たプログラムはどれも知的刺激が喚起されるものでした。子どもの権利を尊重するよう国として法的に整備されたスウェーデンからの招聘講師による特別講演では、子どもに接する医療者ならば誰もが取るべき子どもへの権利尊重の基本的態度が基盤にあって各々の専門性が発揮されていることを知りました。わが国のこれからの医療における子どもの権利擁護に関して一つの方向性を示してくれたように思いました。学会参加を通じて得た沢山の知的刺激をこれからの仕事(学生指導)と職業人としての自己研鑽に役立てていこうと強く動機付けられた機会でした。

新生児集中ケア認定看護師教育課程の紹介

■ 新生児集中ケア認定看護師教育課程主任教員 藤原美由紀 (広島大学大学院保健学研究科附属先駆的看護実践支援センター)

認定看護師制度は、日本看護協会により1995年に発足し、現在、認定看護師教育課程は19分野があり、そのうちのひとつが『新生児集中ケア』です。2003年に新生児集中ケア領域が認定され、2009年からは広島大学大学院保健学研究科附属先駆的看護実践支援センターおよび北里大学看護キャリア開発・研究センターの2つの教育機関で課程が展開されています。現在、新生児集中ケア認定看護師(以下CN)は140名で、全国のNICUや新生児集中ケア領域で活躍しています。

当該教育課程は、新生児の特徴を熟知し、急性かつ重篤な新

生児の救命と全身管理ができること、さらに危機状況にある親の心理を理解し、子どもとの良好な関係を築いていくためのケアを、実践・指導・相談の役割を通して果たせるCNを目指し、教育内容を展開しています。研修期間中には、講義・演習・実習を通して、今までの知識と技術を整理し、経験だけでは不十分なエビデンスに基づいた分析や判断、対応能力を高めるとともに、思考を言語化する訓練をし、新生児集中ケア領域での実践能力を養っていきます。

新生児集中ケア認定看護師教育の目的

1. 新生児集中ケアに関する最新の幅広い知識・技術を用いて、急性期にあるハイリスク新生児の身体的ケアができ、また児の神経行動学的発達および親子関係形成を支援できる新生児集中ケア認定看護師を育成する。
2. 新生児集中ケア領域で優れた実践能力を有し、看護職としての役割に誇りと自信を持ち、自己研鑽を目指すことができる看護師を育成し、新生児集中ケアの質の向上に寄与する。
3. 他の看護職者に対して、新生児集中ケア領域の実践に関する指導、相談を行うことができる認定看護師を育成する。

専門基礎科目では、新生児の発達生理に基づいたフィジカルアセスメントや新生児集中治療室における環境や設備上の安全対策、新生児集中ケア領域で使用する医療機器や薬品管理を習得します。また、親子関係の確立を支援するために受容過程、愛着形成、危機理論、喪失体験などの観点から、ハイリスク新生児の親を理解する学習をします。専門科目では、新生児集中ケア領域における特徴的な疾患の病態・診断・治療について理解し、出生直後の救命、生理学的な安定化や神経行動学的発達の支援に関する看護技術を身につけます。これらの机上での学習をもとに、演習で自己の看護実践を見直し、行動しつづ考

え訓練を積み、全国のNICUの実習で看護過程を展開します。

さらに、チーム医療における協働や倫理的観点から、新生児集中ケアにおける看護の特性を理解し、他の看護職者の実践モデルとなり、指導や相談役割を通して新生児集中ケア領域のケアの質を高める学習を深めます。

2009年現在の新生児集中ケアCNは、5,794人のCNの中でわずか2.4%ですが、現在の周産期医療問題の解決の一助になる役割を担っています。ハイリスク新生児へ質の高い看護が提供できるよう、実践能力の向上を図るための教育を提供し、自律的に行動できるCNの育成に携わっていきたいと思います。

新生児集中ケア認定看護師として私が目指す看護とは……

■ 新生児集中ケア認定看護師 八田 恵利 (名古屋第二赤十字病院)

新生児集中ケア認定看護師となり、4年の月日が経ちました。日々活動に迷いながら、上司や同僚に支えられ、ともに学んだ仲間と議論を交わしながら看護師として成長してきたように思います。まだまだ、理想とする活動には手が届きませんが、実践者として自分が活動するときには、必ず心がけていることが

あります。それは、「必要なときに必要な援助ができること」です。あたりまえのことですが、これがなかなか難しいのです。

新生児に対しては、フィジカルアセスメントをきちんと行ないケアプランへとつなげるという基本的なことをきちんと行なうようにしています。例えば、新生児遷延性肺高血圧症のメ

newbornが入院してきたとします。このような新生児は絶対安静が必要となりますが、それでも、気管内吸引やおむつ交換などの看護技術を行なう必要があります。しかし、普段どおりの技術の提供ではSpO2モニターの上下肢差が出てしまうといったバイタルサインに影響を及ぼします。そこで、新生児の症状をいち早くキャッチし、どのような方法かつタイミングで技術を提供したらバイタルサインに影響が出ないかを考え、ケアプランへとつなげます。もちろんケアの評価も欠かせません。自分だけでなく、スタッフが行なってもバイタルサインに影響が出ないような吸引方法を考え、ケアプランを修正し、再度実践へと結び付けていくようにしています。自分は認定看護師とスタッフとの違いはアセスメント能力の違いが最も大きいと思っています。新生児は自らの意思を言葉で表現することはできません。ですから、新生児のちょっとした仕草や表情などから、「痛い」とか「苦しい」という訴えに対し即対応できること、さらに病態生理に合わせた技術の提供を実践できるように、新生児の心と身体のニーズを満たせる知識と技術の向上に努めなければなりません。

もう1点は、両親に対しても「必要なときに必要な援助ができること」を心がけています。NICUに入院してくる新生児の

両親は、思い描いていた出産とは異なることに衝撃を受け、罪責感と将来への不安を感じます。それでも、新生児と向き合っていく過程で親子の関係が発達していけるように、両親の心の揺れに寄り添えることを大切にしています。両親が何を聞きたいと思っているかを知りそれに答えてあげられること、何か話を聞いてほしいと思っているときに聞ける心の余裕を持つことなどが心がけています。以前、染色体異常疾患の母親から、「話したいときにいつも気がついてくれて、話を聞いてくれて嬉しかった」と言われたことがありました。しかし、私は話をしたそうにしている母親に気がつきながらなんとなく避けていた自分に気がついていました。何かアドバイスや答えを導かなければならないかと思っていたからです。でも母親は、「アドバイスなんていらない、話を聞いてもらえればいいんです」と言われました。この一言で、両親との関わりが変わってきたように思います。両親の思いを受け止めてあげること。これができるようになるために、まだまだ修行が必要です。

NICUに入院してくる新生児の対象は様々で、家族背景も多様です。このような患者のニーズを満たせるように、適切なアセスメント能力をつけるための知識と、新生児の反応を読み取れる感性を磨きあげるために、努力し続けたいと思います。



「リレートーク」 田島香代子さん

自己紹介

秋田生まれ、高2の時、都立高校に転校、横浜赤十字高等看護学院を卒業、就職、赤十字の幹部看護婦研修所修了、母校の専任教員、小児科外来を経て小児病棟婦長を経験後、神奈川県立こども医療センター開設準備室の時に国立小児病院吉武婦長の指導を受ける。4セクションの病棟婦長後、副総婦長を経て県立厚木病院、こども医療センター総婦長を退職。

その後、聖マリアンナ横浜市西部病院看護部長をつとめ(1999年)定年退職。毎日が日曜日になりました。

看護婦になったきっかけ

高校は叔母の家から通いましたので、そこから自立するため、全寮制の看護学校が目にとまり、赤十字ならばという叔母の勧めで赤十字の看護学校を選びました。研修中、上司の命により小児看護を専攻、小児看護を担当しましたが臨床不足を痛感、小児科外来、小児病棟での臨床を重ねましたが尚力不足の毎日を感じ神奈川県に移りました。

新人時代の思い出

新卒時の配置は、産科病棟でした。助産師が常在せず、産婦の経過観察は看護婦の仕事でタイミングよく助産師を起こす責任がありました。早すぎても遅すぎてもおこられ失敗の連続でした。ある日予診室のブザーが鳴るので駆けつけると既に児頭の発露状態、私の両手に元気な男児がずっしりと乗っていました。その時の感動と手のぬくもりは忘れられません。そのあとたっぷりとお叱りされたのはいうまでもありません。

小児看護の魅力

オープン当時、乳児内科病棟を担当、染色体異常のこども達や発達障害の検査入院等病名はわかって治らない病気のあることを知り、毎日母親と会話することが私の主な仕事でした。その後、新生児、乳児外科にうつり、手術によって成長していくこども達に触れ、小児外科の魅力に取りつかれました。それから未熟児病棟、脳外、ICU病棟などを経て臨床を離れ管理業務に専念しました。

直接又は間接的に、こども医療センターで共に働いたスタッ

フの中から濱中先生、大木先生はじめ日本の小児看護のリーダーが大勢育ってくれたことは私にとって大きな誇りと感じています。

在職中、吉武先生のご指導の下「小児の看護計画」の発刊に関われたことと常葉先生にも出会い「小児看護シリーズ」の発刊にたずさわったことが、大きな支えになったことは言うまでもありません。

ストレス解消法

在職中はストレスを知らずに過ぎましたが退職日が近づく頃から口内炎に悩まされ、今でも疲れの赤信号です。退職し、家に居る時間が長くなった時、蕁麻疹に見舞われました。ダニと埃の除去のため家の新築に踏み切りましたけど、ひたすら体を休め、眠る事で解消しております。

後輩たちに期待すること

近代医療の発展の中で、駆け足で進んできました。こども達のいのちとくらしを守るためには、こわいものは何も無いという日々でした。そんな中で良い医療メンバーに恵まれたとつくづく思います。臨床の中では勿論の事教育の場合でも、個々の力量も問われると思いますが何よりもこの仕事にとって大事な事は相互関係とチームづくりが要と思っています。20代の後半から若くしてリーダーになってしまった私は自分ない力を周囲の人達から支えられればなしの現職時代に、今は感謝あるのみです。常に誰かに支えられ、誰を支えているのかという自分の役割を自覚して生きていくことが大切だと考えています。

バトンを受けてほしい人 梶山祥子さん



日本小児看護学会 第20回学術集会ご案内

学術集会テーマ：次代への看護の挑戦—子どもたちの権利を保障し生活をデザインする

【会 期】 2010年6月26（土）・27日（日）

【会 場】 神戸ポートピアホテル（神戸市中央区）

【演題募集期間】 2010年1月7日（木）正午から2月12日（金）正午

【参 加 費 用】 事前登録：会員 9,000円、非会員 10,000円、学生 3,000円
当日登録：会員 11,000円、非会員 12,000円、学生 3,000円

【学術集会に関する情報】

会長講演：子どもたちの権利を保障し生活をデザインする—セルフケア看護理論を活かす—
片田 範子（兵庫県立大学看護学部教授）

特別講演：心の健康教育—子どもが自他のいのちを大切にするために—
富永 良喜（兵庫教育大学大学院教授）

教育講演：子どもの権利と尊厳—インターセックス（性分化疾患）の子どもたち—
東 優子（大阪府立大学人間社会学部准教授）

シンポジウム：社会の中で生きる子どもたちを支援する小児看護—役割拡大の必然—

テーマセッション：子どもの臓器移植における小児看護の役割（仮）、看取りのケア—その子らしく生きることを支えるケアを考える—（仮）、在宅ケアを支える看護師の役割（仮）、入院中の子どもの安全を守ろう—小児領域に潜んでいるリスクを探る—、災害から子どもを守る—病院・在宅・特別支援学校での毎日のイメージトレーニング—（仮）

その他：ナーシングカフェ、20周年記念事業、一般演題発表（口演、示説）、懇親会

【第20回学術集会URL】 <http://www2.convention.co.jp/jschn20/>

【事務局】

学術的問合わせ：〒651-2103 兵庫県神戸市西区学園西町3-4
神戸市看護大学 jschn-20@tr.kobe-ccn.ac.jp

運営の問合わせ：〒650-0046 兵庫県神戸市中央区港島中町6-9-1
日本コンベンションサービス(株) jschn20@convention.co.jp

学会誌掲載論文電子化についてのお知らせ

日本小児看護学会では、国立情報学研究所の学術雑誌電子化・公開事業CiNii（論文情報ナビゲータ）を用いた、掲載論文電子化の手続きを進めています。6か月後くらいには、公開できる予定です。対象は、論文の著作権が学会に委譲されていない10巻2号以前の巻号では著者全員が著作権譲渡に承諾した論文、11巻1号以降は全論文です。公開条件は、刊行から4か月までは非公開、刊行後4か月以降は無料公開となります。詳しくは、追ってHPやニュースレター等でご連絡いたします。

2009年度 評議員選挙のお知らせ

2010年6月から3年間任期の評議員の選挙を行ないます。選挙権のある会員（会員歴 2年以上）には、12月初旬頃に投票用紙を送付いたしますので、案内に従って投票してください。

投票締め切り 2009年12月26日（当日消印有効）

特別支援学校看護師の研修会のご案内

テーマ：「特別支援学校看護師のためのガイドライン」の活用—子どもたちのケア・生活の質を保障するために—

日 時：平成21年12月6日（日）9時30分～16時40分

会 場：東京医科歯科大学

主 催：日本小児看護学会 健やか親子21推進事業委員会
「特別支援学校に勤務する看護師の支援プロジェクト」

参加費：会 員 1,000円
非会員 2,000円

*プログラム等の研修会の詳細につきましては、日本小児看護学会ホームページをご覧ください。

世界看護科学学会での展示



20か国より、860名が参加された第1回世界看護科学学会において発起団体の1つとして本学会もポスター展示を行い、広報致しました。

◆ 編集後記 ◆

日本小児看護学会ニュースレター35号をお届けします。日本小児看護学会誌が年3回の発行となったのに伴い、ニュースレターは3月と11月にお届けすることになりました。第34号からの新連載「リレートーク」のバトンが本号に無事渡りました。今後もバトンパスが続いていくことを願っております。皆様、お楽しみになさってください。広報委員会では、皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。jschn_koho@yahoo.co.jpへお寄せください。学会ホームページ<http://jschn.ac.jp>もご覧ください。

広報委員会メンバー

委員長：濱中喜代

委 員：三輪百合子、長佳代、田久保由美子

込山洋美、村松久江、荒川まりえ